

教育研究報告 国際日本研究の展開

著者	小野 正樹
雑誌名	国際日本研究
号	6
ページ	85-92
発行年	2014-01-15
その他のタイトル	Educational Research Report : Report on the International Expansion of Japanese Studies
URL	http://doi.org/10.15068/00124589

国際日本研究の展開

小野正樹

筑波大学人文社会系

1. 研究の国際化とスピード化

どの分野、いかなる専門でも国際化が進んでいることは紛れもない事実であろう。日本研究においても同様に、海外でも様々な地域でシンポジウムや研究会の開催、学会の設立が起きている。日本がイニシアティブをとるものと、その地域の組織が企画・運営して特徴や目的を話し合うもの、そして共同して行うものがあるが、いずれのイベントにも昨今日本からも多くの研究者が出向き、日本国内の研究を伝えている。海外においても日本国内の研究トレンドや学会状況の話が聞ける。こうした情報、物質両面のスピード化は目を見張る物がある。ナヤン・チャンダ (2009) に興味深い報告がある。

15世紀フランス・オルレアンでジャンヌダルクが亡くなったことが、コンスタンチノーブルにその情報が伝わるまで18ヶ月を有したという。

(『グローバリゼーション 人類5万年のドラマ』〈上〉 p. 223)。

それが、現在では年単位というよりも、例えば、Apple社のタブレット端末が中国で生産され、世界各地で注文されると、輸出経路とその通過時間、そして注文者に届くまで秒単位で記録されているというのである。こうしたスピード化は人の関係を築きやすいという側面もあり、研究に活かせればよりダイナミックな研究となるであろう。

2. 国際日本研究の現状と目的

情報環境の進化に伴い、情報内容の伝達のスピード化は必然的であるが、では、なぜ国際化が必要かという点、結論から言えば、一つの国、一つの地域では解決できないためである。日本研究には大きく二つの潮流がある。一つは、日本の伝統を意識し、繊細でたおやかな側面を強調するような日本を全面に出した研究で、文化の比較、言語の対照研究等がある。一方で、日本の抱える問題を共通課題として、取り組むアプローチやディシプリンもある。筆者が行った、2011年9月25日 中国人民大学での共同フォーラムで挨拶文を再掲する。

日本は2011年3月11日の東日本大震災で明らかになったように、決して経済・文化の“進歩した国”というだけではなく、課題も“進んだ”大国です。原子力をはじめとするエネルギー問題、食を含めた環境問題、少子高齢化問題、高学歴社会などの教育問題、多文化共生社

会など様々な問題があり、それをどうやって乗り切っていくかを考えていかなければなりません。ただ、これらの問題は決して日本だけの問題ではなく、中国でも共通であり、さらに両国以外の地域でも深刻化する問題でしょう。解決のためには、日本と中国だけではなく、今後地域的に隣接している国々と一緒に対話を行う必要があります。人文系の果たす役割、小さくないと思います。

(『北京大学・中国人民大学・筑波大学3大学合同フォーラム予稿集』2011年9月25日)

筆者の専門領域の日本語教育を例にしても、日本社会はスピードを増して、多文化共生社会が進んでいる。その結果求められる日本語教育が異なっている。具体的には大学に留学する学生のためのアカデミック日本語だけではなく、日本に“生活者”として滞在する人々への日本語(年少者の日本語も含む)、ビジネス日本語など様々で、各々日本語のタイプや内容が異なり、日本人の視点からだけでは日本語教育は成立しない現状がある。ヒントとして考えられるのが、EUの言語教育である。しかしながら、長いヨーロッパの歴史の中での離散集合、国家の成立、人権の獲得は、中国、韓国、日本といった東アジアで同じ尺度で考えるには、政治体制、経済制度、思想も異なる三国間ではまだ時間がかかるであろう。だが、今の21世紀に、相互の理解は非常に必要で、ましてや、中央アジア、東南アジアを含めたアジア地域の安定は誰もが望んでいることではないだろうか。

3. 筑波大学人文社会科学研究所のハブ化

世界的に解決しなければならない問題がある中、有志の会員で構成される学会ではできないことを一つの大学で行う意味は何か。ハブとは、「(活動などの)中心。中枢」(広辞苑第六版)とされるが、中心とは、すべてを担うことではない。むしろ担うべき方向性にある。ある地域の人文社会研究すべてを請け負うのではなく、そこで求められている専門性を吸い上げ、適当な研究者に導くこと、それをハブ機能とするのが大学として果たせる一方向性であろう。

この目的で、人文社会科学研究所、あるいは国際日本研究専攻が取り組みの主たる組織となって取り組んだものに、短期留学プログラム「筑波大学国際日本学プログラム Advanced Japanese Studies Program」と、ショートステイ・ショートビジットプログラム「東アジア・ユーラシア地域を結んだ国際日本研究交流プログラム」がある。いずれも JASSO の奨学金を得て実現したもののだが、前者は、本専攻が発発してすぐに立ち上げ、現在までに大凡40名を、協定大学から受け入れてきた。これには、専攻の教員だけではなく、海外の協定大学との連絡調整責任者の方々の協力がなければできないものである。特に、中アジア地域からも積極的に留学生を受け入れたが、本学の中央アジア事務所には多大なる協力を得た。ここに改めて感謝を申し上げたい。

4. プログラム

ショートステイ(受入)・ショートビジット(派遣)プログラムとは、短期留学よりも短い期間で行うプログラムだが、ショートステイプログラムとして本専攻が取り組んだ2011年度、2012年度には受入学生は協定大学以外でも、また、交換留学の協定枠数の上限を超えても認められたこ

ともあり、定員を超えて予想以上の参加希望者があった。本プログラムへの参加者からは、その後正規大学院生になった学生、また別のプログラムで筑波大学に再度留学を果たした学生など、海外の大学院生に筑波大学を理解してもらう一つの手段となっている。

同時期に行ったショートビジットプログラムでは、筑波大学から協定大学を教員と学生が一体となって訪問し、共同してシンポジウムを開催することも行った。協定大学の協力がなければできないものだが、訪問してまずはお互いの研究者の内容を理解し合うことが、その後の研究交流、学生交流に強く活かされていることは言うまでもない。ショートビジットの後、より長い留学を行う学生も出ている。

人的交流を進めるためには、いずれもどのような研究者がいて、どのような研究がなされているかをボトムアップ的にお互いに知ることは不可欠である。そうすることで、視点や前提が異なることから新たな知見を得られることは間違いない。

5. 事例報告

上述の短期プログラムのイベントとして、筑波大学学内で行ったもの、海外の協定大学で行ったものを紹介する。

5.1. 国際日本研究フォーラム（於 筑波大学）

筑波大学で、ショートステイプログラム参加学生およびショートビジットプログラム学生の協働学習の成果とも言えるフォーラムを行った。

2012年1月21日第1回東アジアとユーラシアを結ぶ国際日本研究フォーラム

2012年11月10日第2回東アジアとユーラシアを結ぶ国際日本研究フォーラム

進め方としては、教員の基調講演に始まり、その後プログラム生がポスター発表を行った。テーマは、大きく分けると、文学、言語学、日本語教育、社会、文化と多岐に渡り計30本の研究発表会である。このポスター作成は、大変な労力のかかるもので、本学院生との協働学習がなければできないものであった。

University of Tsukuba 

参加大学

中国	北京大学・北京師範大学
韓国	高麗大学・韓国外国語大学
台湾	国立政治大学
カザフスタン	カザフ国立大学
キルギス	キルギス国立大学
ウズベキスタン	タシケント国立東洋学大学
ポーランド	ヤゲウォ大学・ワルシャワ大学
ウクライナ	キエフ大学
エストニア	タリン大学
日本	筑波大学

基調講演

「日本研究の可能性と課題」
アンドレイ・ベケシュ (筑波大学)

ポスター発表

- session 1 — 文学
- session 2 — 言語学・日本語教育
- session 3 — 社会・文化

総括

「東アジアの日本研究の潮流」
李奇楠 (北京大学副教授)
蔡盛植 (高麗大学副教授)
小野正樹 (筑波大学准教授)

主催

- 筑波大学人文社会科学研究科
- 大学の世界展開力強化授業「入社系グローバル人材養成のための東アジア・欧州協働教育推進プログラム」
- プレ戦略イニシャティブ「日本語日本文化発信力強化研究拠点形成」

共催 筑波大学留学生センター

協力 筑波大学中央アジア事務所

日時
11月10日 (土)
9:45 (開場) ~ 17:10 (総括終了)

会場
**筑波大学
大学会館**

国際日本研究フォーラム

第二回 東アジア・ユーラシア地域を結んだ



第2回 東アジア・ユーラシア地域を結んだ国際日本研究フォーラム

2012年11月10日(土)

筑波大学 大学会館2階 総合交流会館

- 9:45 ~ 受付開始
- 10:15 ~ 開会の挨拶
○ 開会の挨拶
○ 本フォーラムの趣旨
- 10:30 ~ 11:10 基調講演
BEKES Andrej 筑波大学人文社会系教授
「日本研究の可能性と課題」
- 11:10 ~ 12:20 【セッション1】 文学
アピール・タイム
ポスター発表
- 12:20 ~ 13:30 昼食
- 13:30 ~ 14:40 【セッション2】 言語学・日本語教育
アピール・タイム
ポスター発表
- 14:40 ~ 15:00 休憩
- 15:00 ~ 16:10 【セッション3】 社会・文化
アピール・タイム
ポスター発表
- 16:10 ~ 17:10 総括・閉会の挨拶
○ 総括：学生代表
【セッション1】 関建宇(高麗大学大学院生)
【セッション2】 Komarnytska, Tamara Kostyantynivna(キエフ大学大学院生)
【セッション3】 Czarnecka, Marta Alicja(ヤギェウオ大学大学院生)
李奇楠 北京大学副教授
○ 総括：「東アジアの日本研究の潮流」蔡盛植 高麗大学副教授
小野正樹 筑波大学准教授
朱炫姝(筑波大学大学院生)
小野正樹 筑波大学准教授
○ 閉会の挨拶
○ 懇親会の案内、写真撮影
- 18:00 ~ 懇親会
○ 場所：スーパ ファクトリー

第2回 東アジア・ユーラシア地域を結んだ国際日本研究フォーラム < 発表者および発表タイトル >

【セッション1】 文学

no.	発表者名	出身・所属大学	発表タイトル
(1)	Jasnos, Justyna Maria	ポーランド・ワルシャワ大学	江戸川乱歩(1894-1965)と日本の探偵小説 -江戸川乱歩の戦前の作品は日本初めて探偵小説として-
(2)	Bezkyshenko, Yulia Anatolyesna	ウクライナ・キエフ大学	井原西鶴作品の親と子供の関係
(3)	Gvoz, Ganna	ウクライナ・キエフ大学	近松門左衛門の世話物の戯曲における心中
(4)	Kurman, Iryna	ウクライナ・キエフ大学	三島由紀夫の作品における女性像 -理想の女性タイプを中心に-
(5)	Voronkova, Anastasia	ウクライナ・キエフ大学	安部公房の作品に於ける人物の問題 -「箱男」、「他人の顔」、「燃えつきた地図」という小説を中心に-
(6)	Yamshchykova, Veronika	ウクライナ・キエフ大学	安部公房の小説における寂しさ問題 -「砂の女」、「他人の顔」と「箱男」に基づいて-
(7)	Zakharchenko, Oleskii	ウクライナ・キエフ大学	白樺派の著作の女の姿 -志賀直哉の「暗夜行路」と有島武郎の「或る女」を例として-
(8)	郭麗(カク レイ)	中国・北京大学	富沢賢治の仏教童話構成 -「雁の童子」の構成-
(9)	郭曉麗(カク ギョウレイ)	中国・北京大学	『行人』論 -人間関係における「知」の可能性について-
(10)	橋欣怡(ヨウ キンイ)	中国・北京師範大学	和歌における「夢」の一考察 -万葉集から八代集まで-
(11)	関建宇(ミン コンウ)	韓国・高麗大学	『あめりか物語』と在米日本人社会 -シアトル、タコマを舞台とした四篇の物語を中心に-
(12)	王翔(オウ ショウ)	日本・筑波大学	近世筑波地区における水論解決 -小田村組合の番水問題をを中心に-

【セッション2】 言語学・日本語教育

no.	発表者名	出身・所属大学	発表タイトル
(13)	Abduhamidova, Dilafuz Abduhabirovna	ウズベキスタン タシケント国立東洋学大学	日本語とウズベク語での親族関係語彙の対照研究 -母、父、子を中心に-
(14)	Sadikova, Nargiza Habibovna	ウズベキスタン タシケント国立東洋学大学	数量の意味論と数量を表す方法
(15)	Dyushkeeva, Mirjan	キルギス・キルギス国立大学	日本語のアクセントの種類や音の長さ
(16)	Zhangazieva, Elmira	キルギス・キルギス国立大学	女言葉と男言葉
(17)	Suiste, Maarja	エストニア・タリン大学	日本の企業における企業文化やそのサブカルチャー -企業文化の公的や個人的な解釈の相違-
(18)	Komarinytska, Tamara Kostyantynivna	ウクライナ・キエフ大学	現代日本語における法律用語の特徴
(19)	Kozyriev Ievgen	ウクライナ・キエフ大学	日本における正教会・日本語正教会訳の神学的な書物 -正教会訳聖書をを中心に-
(20)	Maksymchuk, Tetiana Oleksandrivna	ウクライナ・キエフ大学	インドネシアにおける日本語起源の語彙
(21)	陳夕婷(チン セキテイ)	中国・北京師範大学	ポートフォリオを利用した「総合日本語(精読)」授業 -中国人日本語学習者における自律的学習支援への試み-
(22)	朴淨娥(パク ジョンア)	韓国・高麗大学	相談場面における助言のストラテジーの日韓対照研究
(23)	蔡依庭(サイ イテイ)	台湾・国立政治大学	アスペクトを表す結果複合動詞の後項及び結果補語 -日中対照研究の立場から-
(24)	黄盛安(コウ モリヤス)	台湾・国立政治大学	日本語における母音脱落現象 -語頭母音「い」の脱落(aphaeresis)を中心に-
(25)	馮元(ヒョウ ゲン)	日本・筑波大学	日本語の並列助詞と中国語の並列接続詞の対照研究 -「と」、「や」と「和」を中心に-

第2回 東アジア・ユーラシア地域を結んだ国際日本研究フォーラム < 発表者および発表タイトル >

【セッション3】 社会・文化

no.	発表者名	出身・所属大学	発表タイトル
(26)	Arin, Rassul Gabdrassululy	カザフスタン・カザフ国立大学中央アジアにおけるアフガニスタンの地政学的問題に対する日本の役割	
(27)	Zhalil uulu AkyI	キルギス・キルギス国立大学	農業マーケティング特徴 —温室を例として—
(28)	Mursabekova, Zhyldyz	キルギス・キルギス国立大学	企業の社会的責任 (CSR)
(29)	Lauk, Annika	エストニア・タリン大学	オタクのサブカルチャー —オタクのサブカルチャーの中の3次元と2次元の女性—
(30)	Nukke, Susanna	エストニア・タリン大学	現代のアイヌ民族 —日本人のアイヌ民族についての意識—
(31)	Biernat, Kamil MarceIi	ポーランド・ヤギェウォ大学	日本製ラップとヒップホップサブカルチャー
(32)	Czarnecka, Marta Alicja	ポーランド・ヤギェウォ大学	文化のあいまいな境界 —歌舞伎とシェイクスピアのエリザベス超演劇—
(33)	Zajbert, Marta Aleksandra	ポーランド・ヤギェウォ大学	日本の写真 —ピクトリアリスムに基づいて分析—
(34)	Zalewski, Jerzy Bronisław	ポーランド・ヤギェウォ大学	「目に見えない移民者」 — 1945年から1980年まで日本に不法滞在するコリアン—
(35)	Stryczyk, Katarzyna	ポーランド・ワルシャワ大学	福沢諭吉と『文明論之概略』に含まれた「文明」という概念
(36)	鄭熙靜 (チョン ヒチョン)	韓国・韓国外国語大学	日本人における他者志向的な自己の考察
(37)	楊素茵 (ヨウ ソイン)	日本・筑波大学	中国におけるインターネット空間の公共性に関する研究 —インターネット利用者の公共に関する意識調査を通して—

5.2. 国際日本研究フォーラム（於 協定大学）

海外でのフォーラムも並行して行い、教員と大学院生がともに研究発表を行った。教員は自らの研究内容を紹介することや、日本の研究を紹介することでもあった。それを承けた北京大学のある関係者からは、「日本の研究は実証的である。中国の研究は総合的である。西洋の研究は理論的である」と言うコメントを得たが、こうした理解を進めることが国際日本研究の深化につながり、共同研究となり、そして教育においても有益なものである。

以下に取組を紹介する。

2011年度

「第9回北京大学・人民大学・筑波大学合同フォーラム」中国・北京大学2011年11月5日

「第3回高麗大学・筑波大学合同フォーラム」韓国・高麗大学2012年2月10日

「第9回文明のクロスロード—ことば・文化・社会の諸相—」ウズベキスタン・サマルカンド外国語大学2012年3月15日—16日

2012年度

「ヘルシンキ大学・タリン大学・筑波大学日本研究学術フォーラム」於フィンランド・ヘルシンキ大学2012年9月7日

「2012年キエフ国立大学・筑波大学日本研究フォーラム」於ウクライナ・キエフ国立大学2012年11月27日

「第2回北京師範大学・筑波大学学術交流会」於中国・北京師範大学2012年12月15日—16日

「第10回文明のクロスロード—ことば・文化・社会の諸相—」於カザフスタン・カザフ国立大学2013年3月15日—16日

各地域の特色、特徴を理解し、反映させ、相互に今後の発展を語り合う貴重な機会となった。

6. まとめ

本試みが、日本研究にどのように寄与できるか。今後共同学位など質的レベルを上げるためにはシラバスを含めた単位の共通理解が必要となる。学内経費としては、ブレ戦略イニシアティブ「日本語文化発信力強研究拠点形成」経費、革新的な教育プロジェクト支援経費、国際連携プロジェクト（イベント・フォーラム形成）など、本プログラムには大いなる支援を得た。なお、詳細は、川那部保明・小野正樹(2012)「東アジアとユーラシアを結んだ国際日本研究の挑戦」、ウェブマガジン『留学交流』特集 大学の留学生受入れ戦略（2012年1月号）、独立行政法人日本学生支援機構にも掲載されている。

<http://www.jasso.go.jp/about/webmagazine201201.html>

<http://www.jasso.go.jp/about/documents/tsukuba2.pdf>